

“やきもの”の話

(陶磁器の分類、粘土とは)

会員 延原勝志

色々な遺跡・古墳・廃寺など新たに見つかる歴史的遺産は多くあります。その中で発見される陶器（陶片）などが、その時代特定の「決め手」となります。土器を含め我々は、“やきもの”と呼んでいます。現代の“やきもの”である陶磁器を分類して見ます。

岡山に住んでいる我々は“やきもの”と言えば、備前焼を思いうかべる方々が多いと思いますが、有田・信楽・丹波焼、また瓦とか土器など様々な“やきもの”があります。それらは大きく分けて土器・ニューセラミック・磁器・陶器・炆器（セッキ）に分かれます。この分類については諸説ありますが、私はこの分類がわかりやすいと思います。



自分の窯の前で

まずは土器について説明します。陶土（粘土）を素材とし、軟質系と硬質系に分かれます。軟質系は縄文・弥生土器、土師（はじ）器など、窯で焼いていない器（うつわ＝野焼による焼成）です。

四世紀頃に朝鮮半島より須恵器が日本各地に伝わり、窯で焼く“やきもの”が出来て着きました。窯で焼くことにより、より硬く締まる陶器、これらは硬質系の土器と考えます。

新しいものではニューセラミック。錆びない包丁・はさみなど、クレサンペールの商標でも販売されている京セラの宝石・人口ビー・ダイヤモンドなどですが、“やきもの”に入れて良いのか否かは説により、違いがあります。

そして**磁器**、基本的には陶石（岩の中の長石などが粘土化し、鉄化合物が洗い流されたもの）を素材にしています。軟質系は便器・洗面器などで、叩くと「コンコン」という鈍い音がします。硬質系は有田焼・九谷焼などで、石などで叩くと「チンチン」という高い音がします。これは素材の耐火度と焼成温度の違いによるものです。」

最後に**陶器**。これが一般に広く普及している“やきもの”です。陶器は磁器と違い陶土を素材にして、釉薬を掛けたものが多いのです。陶土とは花崗岩が風化して堆積したものです。風化して先ず堆積した粘土を一次粘土といいます。

産地でいえば、美濃・唐津・萩・信楽・伊賀焼などです。蛙目（ガイロメ＝石英粒子）が多く含まれます。

その一次粘土がさらに風化が進み堆積したものが二次粘土です。樹木等が腐食されながら堆積されてゆきますので、粘性が強いことが特徴です。（木節粘土ともいいます）

一次二次粘土を使う“やきもの”は釉薬を使います。素地のまま焼き締めたら水が漏れるので、水漏れを防ぐために釉薬を使うのです。釉薬とは木の灰・石の微粉などを調合し約 1200℃（±約 100℃）の高温で熔けるガラス質のものです。これを器の表面に施すことにより、水漏れが止まるわけです。例外として信楽、伊賀焼などは釉薬を使用せず、焼締めたものもあります。昔から「伊賀＝信楽の七度焼き」と言われるのは、七回程焼くこと

によって、水漏れを止めたという話しです。

そしてまた、二次粘土が風化され、流されて海岸、または海の中に堆積し、海の中のアルカリ分（ソーダ）微生物などを含み再び地上に隆起し風化したものが、沖積粘土、つまり炔器粘土です。**炔器**とは鉄分やその他の不純物を多量に含む故に、収縮率が大きく焼成時に色が付きやすく、また耐火度も低い事が特徴です。



延原夫人の作品



亀甲模様(考古吉備模様)壺の作品

備前のヒヨセ土（田土）、常滑の朱泥、鳴門の大谷焼の田土などです。備前焼の場合吸水率0.2%（24時間）程です。若干目には見えない程度の水漏れをしますが、その事により器の表面が冷やされ気化熱がおこり内部の水も冷やされることにより、水が腐りにくくなりますので、備前焼の花瓶は花持ちが良いといわれています。

また徳川家康が天下を取った後「備前は大甕（おおがめ）を作るな！！」というお触れを出しています。大甕を城の中に大量に備え水や穀物を、貯蔵できなくしたのではないかと私は考えています。また「備前焼の歴史」についてレポートさせて戴きます。

編者注 筆者は備前焼伝統工芸士で備前市文化財保護指導委員であります。